

終の栖より

船尾 章子

いまどき、三畳間なんて滅多に見かけない。高層の集合住宅に生まれ育ち、家には畳がなかったという学生さえそう珍しくはない時世である。建売住宅も、和室がないものが目につくし、かろうじて畳の部屋がひとつあったら、それは規格化された四畳半か六畳だろう。

三畳か四畳の小間に出会う機会は、もはや、登録文化財として保存の対象となった伝統的木造建築が一般に公開されている場合くらいかもしれない。旧家の住宅なら、必ずや書院風の広い客間があり、これに接して、簡素ながらも小さな床の間や壁や建具の造作に趣向を凝らした小間が設けられている例が少なからず見られる。その小空間には、なにかしら心安らぐ風情が漂っているものである。これが、来客のために雑用を処理する小部屋だったとは思えない。おそらくは、あるじがひっそり物思いに沈んだり、重要な事柄について来客と差し向かいで相談したり、というような、限られた人だけのための特別な場ではなかったろうか。

そこから想起されるのは、侘び茶を突き詰めた千利休が行き着いた小宇宙である。京都郊外の大山崎に残る待庵、二畳敷きに床の間を加えても三畳に満たない茶室が、丈の低い躡り口で外部から隔てられた、薄暗く閉鎖的な小間である。それは、客を迎える場としては、前例のない構造だったとされるが、私的空間としてなら、これに通じる小部屋が古くから存在した。例えば、現存する日本最古の民家とみられ、千年家とも称される箱木家住宅（神戸市北区、室町時代）は、開放的な広間の裏に、妻戸と塗り壁で囲まれた三畳ほどの小部屋を擁する。そこは主人の寝室にして重要な品の安置所だったという。妻戸を内側から固定すれば、完全に閉じられた空間となったのである。厚い壁で囲まれていて板戸から出入りする部屋は、さらに遡って、平安時代にも尋ね当てることができる。寝殿造りにみられる塗籠と呼ばれるもので、やはり寝所に用いたという。かぐや姫を迎えに到来した月からの使者たちに姫を渡すまいと、竹取の媼が姫と一緒に立て籠もったのが、この塗籠であった。現代の住空間からは姿を隠しつつある小間だが、こうして系譜を辿ると、

人間の営みにとってなにやら本質的な意味を孕んでいるように感じられてならない。

大学組織の一員としてのわが研究・教育生活は、冷戦が終息しつつあった1987年に、任期限定の大学助手として東京で始まった。それから、国連安保理決議に基づく多国籍軍がクウェートを占拠するイラク軍を排除した1991年の4月、名古屋近郊の私立大学にて、国際法と国際機構論を担当する専任教員となり、さらに、阪神大震災とオウム真理教の無差別テロ事件の起きた1995年の4月に、国際関係論の担当教員として京都の私立大学に移った。そして、国際法と国際機構論を担当するために神戸市外国語大学に着任したのが2002年4月、アルカイダによる大規模なテロ事件が世界を震撼させてからほぼ半年後であった。

勤務先が変わるたびに住まいも変わり、転居につれて住居は広がっていった。その最大の要因は、持ちものの大半を占める本が増え続けたからである。歳月とともに、仕事上接する学生や研究者の数も増える。それが、ささやかなるわが研究・教育活動の幅を広げてくれた。広がることの末に思いを及ぼすこともないまま日々が過ぎていった。

4時間を超える外科手術の麻酔から覚めたとき、拡大を暗黙の前提とする日常感覚は雲散霧消していた。自分の時間には限りがある。この当然の事実が、はじめて意識の枢要に浮上した。それにより、あらゆる判断と選択の基準は組み換えられる。仕事の持つ意味から、住まいの意味、時間の流れ、自然観に至るまで、悉く変化した。余計なことは極力除きながら本質を残すことが重大な関心事となる。縮小、選別、吟味、削減への転換だった。

かくて規格品の賃貸住宅に住むのを已めにした。終の栖を奈良に定めた。かの大伴氏所縁の、佐保の地である。この地で木造住宅を探し求める間、常に念頭にあったのは、三畳の小間を造ることであった。これは、床の間代わりに出窓を配した北向きの部屋という形で実現できた。半間の入り口には古建具の杉戸を入れた。一枚板である。出窓に障子を当て、板戸を閉めると、閉じられた小空間となる。ここには何も置かないと決めている。

利休がその美意識を凝縮させた待庵をめぐるのは、あれこれと解釈が語られる。例えば、天岩戸にも通じる現世から切り離された非日常空間だとか、普段は人の出入りしない出産のための産屋だとか。切り詰められているがゆえに、かえって想像力を掻きたてるのかもしれない。いずれにせよ、人間存在の根源を生と死の彼方に探るのが利休の構想だったとはいえそうである。それは、ことばでは到底掬いきれない、不立文字の世界に違いない。

これまでおよそ30年間、ことばを操り、文字を連ねるのが仕事であった。

本が増えるのは、必要からはもちろん、本好きだからでもある。これからも日常ことばを使い続けるのならば、三畳の小間だけは、ことばのない世界、特別な非日常空間にしてみるのも一興かと思っている。一切ことばを使わないというのが、無念無想の状態だとすれば、実は容易には達成できない。ことばには豊かな可能性がある一方で、決してことばの及ばない世界も確かに存在する。感覚器が受容できない微細なもの、遠方のものが確かに存在するように。一旦ことばを断ってみるのは、そんな未知の領域に踏み出す第一歩となるかも知れない。

そういえば、臨済禅の公案集、『碧巖録』には次のような一節がある。

「一塵挙がって大地収まり一華開いて世界起る」 第一九則

微細な塵が大地のすべてを内包し、小さな花に世界全体が備わっているというのは、一片の塵、はかない花を媒介に無限の広がりをつまえられるということなのだろうか。とにかく、見過ごしがちだった細部を愛でて新たに無辺際を感得しようとの思いから、わが栖を一華居と銘じた。果たして、小間から何が感知できるのか、いまは未知数ながら、ことばの溢れる世界を補完する何かがあるに違いない。

さらば、どなたさまも、どうぞ御機嫌よろしゅう。